

エリツィン再選後の ロシア情勢

7月10日 月例研究会より(要旨)

■ロシアは民主主義への過渡期

7月3日のロシア大統領選挙では共産党が敗れて第二位だった。これにはロシアにおいて共産党が再び政権を取ることはないという見方と、共産党が40%を確保したことは大したものだという二つの見方がある。ロシア国民は自分の立場を一つの政党に決めていない。ロシアではまだ民主的な選挙が何度も行われていないから、国民はどんどんその立場を変える。今後どのくらい失業者が出るか、経済が苦しくなるか、農村と都市との格差が広がるか……全てが今後にかかっているのだ。共産党をどう見るかはまだ結論は下せないが、今回の選挙に関するかぎり、共産党に政権を持たせることには一応「Nyet (No)」と出た。

エリツィンはマスコミを独占して大いに反共宣伝を盛り上げた。「ジュガーノフの共産党になったら過去に戻る」、そして「自分の改革は間違いも犯したし困難ではあるが、やはり改革を続ける自分に投票してほしい」と訴えた。エリツィンは過ちを認めるという謙虚な姿勢を示し、共産党と自分との二者択一を迫ったのだ。しかしこれには欺瞞がある。共産党は敗れたが、一方ではヤプリンスキーを始めとする民主政党も惨敗している。エリツィンは「共産党」と「エリツィン」の選択の他にヤプリンスキー、つまり「民主主義」というカードを隠していたのだ。議論を二項対立に持っていくのはボリシェビズムの伝統だ。第一次投票で共産党のジュガーノフに3ポイント差に肉薄されたエリツィンは、第三位のレーベジとの連合という戦略に出た。エリツィン、レーベジは権威主義者だ。二人の勝利は、ロシア国民が「共産主義はもうごめん。といって民主主義は時期尚早」として、これらの中間段階である「権威主義」を選択したことを意味する。

■内外に難問山積

ロシアには内外に問題が山積している。第一はエリツィン自身の健康問題だ。年齢は65歳でロシアの平均寿命を7歳も上回っている上、去年二度も倒れて合計5ヵ月も休養生活を送った。大統領選でも最後の一週間は姿を現さなかった。その他背中中の病気だとかアルコール依存症だとか鬱病だという説もある。第二の問題は権力闘争だ。大統領選で台風の目となったレーベジはエリツィンがかすむぐらい活躍したが、それはエリツィンの当選までだった。彼自身にも四つの敵があるといえる。巻き返しを企む強権派、穏健民主改革派、チェルノムイルジン首相、そしてエリツィ

国際日本文化センター教授

木村 汎



ン大統領自身だ。エリツィンは有名な「No.2 殺し」と言われる。ブルブリス、ルツコイ、ハズブラートフ、ガイダル、スココフと、今まで自分の地位を脅かす人物で長く側近に付けていたことは誰一人としていない。現時点でNo.2であるレーベジも、いずれ切られるのではないか。三番目は経済問題。エリツィンは選挙に勝つために「公約」という手形を切りまくった。しかも国家予算を切り崩しての大盤振舞いだった。必ず秋には危機に陥るだろうし、すでにその兆しが出ている。四番目は外交問題だ。これは愛国主義的・大国主義的が高まる傾向にある。ロシアには19世紀から「大西洋主義」と「ユーラシア主義」という二つの考え方がある。ヨーロッパの先進国に追いついていくべきかロシアの国民的伝統を温存すべきかという、西洋派とスラブ派の考えだ。前者の代表がゴルバチョフとコズイレフ前外相だ。しかし今年1月にプリマコフが外相に就任した。ユーラシア主義者の彼の出現は、エリツィンがアジアにも目を向けるという姿勢を具現化したものだ。レーベジが政権に加わることでその傾向は一層強まっている。またエリツィンのリヨン・サミット欠席で、エリツィン再選に肩入れしていた西側の熱が冷めることも予測される。

■北方領土問題解決の好機

対日関係については、エリツィン、チェルノムイルジン、プリマコフ、レーベジもみんな愛国主義者で、北方領土返還は非常に難しくなったという見方があり、選挙中もそういう発言が多くなされた。しかし一方にあるのは、それはなりふり構わぬ選挙中の発言でさほど大げさに取る必要はない、むしろ大局的には解決に向かっていているという見方だ。すでにロシアには対日関係を引き延ばす口実はない。いつも「国内情勢が不安定」と言っていたが、選挙の洗礼を受け、しかも大差で勝利したエリツィンは、いま最も権力が強いときだ。ゴルバチョフとエリツィンの訪日は権力基盤が脆弱化したときだった。国内で「譲歩するな」という声が高まっているときだ。それを考えれば、領土問題の解決も今が絶好のチャンスだ。今回はエリツィンが日本に来たから、外交儀礼として今度は日本の総理が行く番だ。そしてモメンタムを失わないままに、「日本との関係正常化が最優先だ」と畳み掛けるべきだ。